

今年も、6月23日に沖縄全戦没者追悼式が行われました。平和祈念公園の平和の礎には、新たに78名の戦没者の名前が刻まれたようです。沖縄戦終結から71年…今だ、その名が明かされぬままに戦没者の方々がいます。毎年、県知事の平和宣言や首相の挨拶、報道を通して、沖縄戦は「20数万人余りの尊い命を奪った」というフレーズを見聞きします。亡くなった方一人ひとりが尊い命であるにもかかわらず、「20数万人余り」というおおよその数でしか把握し切れないところに、戦争の悲惨さが言い表されているように感じました。「みなさんはね、最近『被爆体験の継承』と一括りに、まるで一つの体験があるかのようにまとめようとしていますね。私たち一人一人の体験は『被爆体験』という一言では語りきれませんよ。被爆者一人一人が個別の、その人にしかない人生の中で原爆に遭っているのですから。一人一人の体験も別々なんです。個が消えていくことが私は一番恐ろしいことだと感じています。そうするとまた、あの戦争の時代に戻っていくことになるからです」。広島市の被爆生存者、切明千枝子さんの言葉です。

聖書箇所には、イエスが弟子達を世に派遣する際の言葉が記されています。イエスは、2羽の雀が1アサリオン（当時の最安値）で売られているのを見て、その1羽さえ、神の「許しがなければ、地に落ちることはない」と語りました。2羽の雀がワンセットで括られ、安価に扱われている状況のなかで、イエスはその1羽の命のかけがえのなさ、尊さを見ておられる神の眼差しを示したのです。一方、ユダヤ社会では、律法を基準として、十把一絡げにはできない人間を「正人」と「罪人」という2種類に分け、「罪人」を蔑んで見る風潮がありました。そのような大きな括りのなかで閉じ込められてしまう一人ひとりの命の真実とイエスは向き合っていきます。

一人の命に対する心遣い…しかしそれは、時に、地味で目立たず、大きな流れのなかで誰からも気づかれないことがあります。でも、「（神は）あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている」とイエスは語りました。「だから、恐れるな」と。「『ちょっと行って1センチでも椅子を合わせて帰ってくるだけでも、神様がなさることだから、きっと素晴らしいことが起こるに違いない、実りがあるぞ』という小さな憧れやワクワク感をどんなつまらないと思える奉仕にでも、感じとれるようなセンスを養っていきましょう」（晴佐久昌英神父）。

（文責：望月達朗牧師）

